

令和元年6月19日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13249

研究課題名（和文）映像記録を用いた日本語教師の語りの保存に関する基礎研究

研究課題名（英文）Basic research on preserving narratives of Japanese language teachers using visual recording

研究代表者

牛窪 隆太（USHIKUBO, Ryuta）

関西学院大学・日本語教育センター・言語特別講師

研究者番号：80646828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果として、5名の教師の語りからキャリアについての20分程度の映像作品5本を完成させた。編集過程において実施した視聴会では、以下の事象が観察された。1) 複数の教師の語りを視聴することで参加者はそれらを比較しながら自分の経験と関連づけていた。熟練教師の語りについて、評価、解釈を行うタスクにおいて、参加者が自身の教師としての課題や悩みを打ち明ける場面が見られた。2) 初対面の教師間においても映像が媒介物となることで、経験の共有から新たな視点を得ている様子が観察された。これらの結果から、語りの映像の視聴することにより生成される、新たな語りの共有を軸とした教師研修のあり方について議論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

映像の使用用途としてまずは、教師を志す者が自分のキャリアプランを考えるための資料とすることが考えられる。従来の文字を媒体としたインタビュー記録などと比較しても、映像のもつインパクトは大きく、複数のキャリアを比較して視聴できることでキャリアを考えるうえでの有益な参照枠とすることが可能である。また、現職教師研修で用い、熟練教師の語りを解釈するワークを実施することで、現職教員が自身の信念体系と実践知を再考するための機会を提供することが可能になる。これらの活動は、「新たな語りの生成」という部分で通底しており、「映像視聴の先」にある可能性を示すものであると考える。

研究成果の概要（英文）：As a result of the project, we made five short movies that contain narratives of expert language teachers about their professional career development. While editing movies, trial viewing sessions were conducted and data, in the form of feedback comments from participants and the audio of their discussion, was collected. By analyzing this data, we have found that the participants compared different narratives and linked the stories of experts to their own experiences. When participants were required to evaluate and interpret the narratives of experts, we could observe that participants gained the new view point of language teaching by sharing their experiences as teachers. From these results, we argued about the possibilities of the teachers producing the new narratives by referring to the stories of expert teachers, and we concluded that we could apply this method to the language teachers' training.

研究分野：日本語教育学

キーワード：映像記録 教師の語り ナラティブ 日本語教師

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語教育においては、1983年に公示された「留学生受入れ10万人計画」を受けて、国内大学に教師養成課程が設置され、本格的に専門家の養成が始まった。当時日本語教師は、民間・大学機関を合わせても数百人程度であったとされ、それを2万人程度に増員するため全国の大学に専門教員が配置された(日本語教育振興会2010)。本研究において「教師養成第一世代」とは、この時期に教師養成に携わるようになり、日本語教育の礎を築き業界を牽引してきた世代のことを指す。「留学生受入れ10万人計画」は、2004年に達成を迎え、教師数も3万人に達した。2008年に告示された「留学生30万人計画」の達成目標年度を2020年に迎え、今後、日本語教育の役割はさらに拡大していくことが予想される。しかし現在、「教師養成第一世代」は教育現場から退く年齢に達しつつあり、その経験が十分に伝承されないままになっている。日本語教育の創成期を支えた教師の語りは、現場教師にとって新たな教育観・実践観を誘発する契機となりうるものであり記録と保存が急務となっている。

2. 研究の目的

研究代表者は、科研費若手研究として新人日本語教師のナラティブに注目した研究調査を実施し、教師の経験を記述しながら、日本語教師がおかれた教師環境の問題点を検討してきた。調査結果からは、現場教師が不安定な雇用環境におかれ「フリーランス」という意識のもとで日本語教育に携わっていること、また、他の教師との関係性を築けずに、個人の経験として教育実践を考えなければならない中で、養成講座で学んだ典型的な授業パターンを再生産することに葛藤を感じるが見えてきた。このことから研究代表者は、現場教師が、お互いの教育観や実践観を問い直す場として「同僚性コミュニティ」を構築する重要性を主張し、自身も授業研究会を運営してきた。しかし、教師による研究会は、ノウハウの交換に陥りやすいことも指摘されており、日本語教育をより広く議論するためには、限られた教師の経験だけでは不十分であると実感するようになった。そこで「第一世代」の教師の語りを参照可能な資料とすることで、現場教師それぞれが、新たな語りを生成するという教師養成モデルを構想するに至った。本研究の目的は、第一世代の語りの映像化を通して、語りを保存するためのノウハウを得ること、また編集過程において視聴会を実施しデータを集めることで、現職教師研修への映像の活用可能性について検討することであった。

3. 研究の方法

研究は、以下の手順で実施した。

(1)理論研究

教師の語り・映像記録についての先行研究レビュー

日本語教育学における著作のレビューによる「第一世代」の選定

まず、理論研究を各分担者が実施しながら、学会などの場を利用して、研究チームで集まり、報告会と理論的枠組みの再検討を行なった。1980年から現在までに公刊された日本語教育論を扱った著書や日本語教材について通時的に検討し、著作物から読み取れる日本語教育観・教育実践観を検討した上で10名程度の「教師養成第一世代」を選定した。

理論研究においては、職業的熟達における知識論を参考に、実践知形成における教師個人の価値判断への注目に着申した。職業的熟達における知識創造論においては、実践知・暗黙知の形成過程が注目され、暗黙知をとらえなおすことで、実践知へとアプローチするという方法論が提唱されていた。その一方で、暗黙知とは知識が人格的に形成されることを示す概念であるという反論も提出されており、暗黙知を意識化することで実践知になるという素朴なモデルについて批判もなされていた。さらに、英語教育分野における言語教師認知の研究では、教師の実践知の形成を支えるものとして、教師自身の価値観が重要視されるようになってきており、個々の教師は教授経験から自身の価値観に沿って、異なる実践知を形成していることが指摘されていた。以上のことから、映像視聴の意味として、熟練教師の価値観に触れることによって、視聴者の価値観が触発されるというモデルを考えることとした。

(2)予備調査の実施

「第一世代」に対する予備インタビュー調査(3名程度)の実施

パイロット的な映像編集の実施(2編20分程度)、実践的側面からの仮フォーマットの再検討

理論的枠組みから作成された仮フォーマットを実際の映像記録において使用し、分担者間で繰り返し検討することで具体化した。特に、理論面と実践面から仮フォーマットの検討に時間を割くことで、共同研究者間での共通認識を深め、2年目以降の映像記録をスムーズに行うための基礎を築くことを目指した。編集においては特に、熟練教師それぞれのキャリアにおいてターニングポイントとなる出来事やエピソードについて語られている部分を中心に語りを抽出し、教師自身のキャリアの変遷と個人の価値観がよくわかる映像作品となることを目指した。また映像の作成過程において、インタビューをどのように実施するか(聞き手を映像に含めるかどうか)、また誰がインタビューを実施するか(語り手との関係性は何か)によって、映像に

おける語りの内容や言葉の選択が変わることも観察された。そのため、研究においては、比較的キャリアの浅い教師が視聴するということを念頭に語りを収録することを話し手にも周知し、また映像の収録の際には、可能な限り聞き手も映像に含めるという方法を取ることにした。仮フォーマットは、2時間の映像からキーワードを抽出しキャプション化することで、まず中心点を定めたとうえで、残りの部分を削っていくという方法で作成した。しかしながら、複数の映像を比較するうえで有効であると判断される、同内容の語り（当時の日本語教育に対する認識など）については、できる限り残すことにした。

(3)映像の視聴会の実施とデータ収集

作成されたパイロット映像について検討するため、2名程度の映像記録について、5名程度の参加者に視聴してもらい、内容について話し合う視聴会を関西において計3回実施した。視聴会は、教師歴5年程度の教師を対象とし、タスクシートを用いて語りの気になった部分を特定してもらったうえで、記入した内容について優先順位をつけ、自由に話し合ってもらおうという方法を採用した。タスクシートについて分析した結果、参加者たちが記入した気になる点は緩やかに重なりがある一方で、理由については正反対の評価が行われている場合もあること、また、語りに対して自身の評価や解釈を述べるというタスクにおいては、教授経験や所属機関での立場にかかわらず、誰もが話し合いに参加でき、話し合いのターンが固定化されにくくなることが示唆された。さらに、話し合いの流れについてカテゴリー化を行って流れを分析した結果、映像の語りの解釈を述べる文脈で、参加者から自身の教師としての悩みや課題が自然に語られる流れを複数とらえることができた。この背景には、映像の解釈を話すうえで、自身の価値判断を話さざるを得ない流れが生まれていること、またアンケートの記述からは、解釈の対象となる熟練教師がその場にいなくて気負いなく自身の解釈を話せるといった、気楽さが生まれており、論点が、映像の語りについての解釈という間接的なものになることで、話し合いが促進されている可能性も示唆された。

(4)教師研修方法としての提案とワークショップの実施

視聴会で実施した、熟練教師の語りの映像に対して評価や解釈をすることによって、自身の経験を語るという方法について、「批判的国際言語教育シンポジウム（武蔵野大学）」で口頭発表を行い、フロアからフィードバックを得た。その際に得た、視聴する映像については、編集意図が明らかにされている必要があるのではないかという意見は、その後の映像使用の方向性を考えるうえでも大きな示唆を与えるものになった。その後、映像の再調整を行い、「言語文化教育研究会第5回年次大会（早稲田大学）」において、2時間のワークショップを実施した。ワークショップは、一つの映像のみを用いて、語りについての解釈、評価を行い、グループで話し合うというものであったが、学会のワークショップとして実施することで、異なるキャリアをもつ参加者が初対面の場面で話し合いを行うという状況を作ることができた。参加者を対象に実施したアンケートからは、以下の2点が明らかになった。1)関係者以外の参加者からも、映像の語りから、それぞれの教育哲学や信念、あるいは仕事に対する姿勢そのものについて、異なる階層での内省が行われていることがわかった。2)映像が媒介となり、映像の語りについての解釈や評価を行うという話し合いの方向性を取ることで、キャリアの違う者同士が、初対面の状況で話す場合であっても、問題なく意見交換は進められており、理解の違いはあったとしても同じ映像についての話し合いを実施することで、参加者の背景や所属についての異質性が話し合いのリソースとなっている。このことから、映像の視聴者や映像の組み合わせを変えることによって、生成される語りの形や、話し合いの流れが変わることが示唆された。

4. 研究成果

本研究の成果としては、まず、5名の教師の語りについて20分程度の作品を作成させ、アーカイブ化するための準備を整えたことがある。映像については、今後、段階的に公開範囲を広げ、海外や遠隔地にいる現職教師にも活用可能な資料として公開することになっている。

また、研究の編集過程において実施した視聴会では、上記の通り、複数の教師の語りを視聴することで参加者が比較しながら自分の経験と関連づけていること、また熟練教師の語りという間接的な対象について、評価、解釈を行うことで、直接的な信念対立に陥ることが回避されながら、それでも、お互いの価値基準が問題になる話し合いの場面が作りだされていると判断される話し合いが観察された。映像を用いた教師研修については、まだ議論の余地が残っており、今後、さらに検討する必要があるが、教師の話し合い過程やその後の変化をより詳細に分析することで、映像視聴による「語りの生成」の意味と実践知との関連性へと結びつけることができると考えている。この議論の道筋が見えてきたことも、本研究の成果として位置づけたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

生窪隆太、三代純平、金考卿(2019)「語りの視聴から何が生まれるか 教師の語りの映像アーカイブズ化の試み」言語文化教育研究学会第5回年次大会(於早稲田大学)

生窪隆太、金考卿、三代純平(2018)「ベテラン日本語教師のナラティブの映像化とその教員研修への応用の試み」批判的言語教育国際シンポジウム(国際学会)(於武蔵野大学)

生窪隆太(2018)「熟練教師の語りを学びの資源とする日本語教師研修の提案」言語文化教育研究学会第4回年次大会(於立命館大学)

三代純平、首藤なずな、福村真紀子(2016)「社会とつながる日本語教育を「見える化」するために あいあい×ムサビプロジェクトのドキュメンタリー映像から」第48回言語文化教育研究学会(月例会)(於早稲田大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
教師の語りの映像アーカイブズ(現在, 公開準備中)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：三代 純平

ローマ字氏名：MIYO, Jumpei

所属研究機関名：武蔵野美術大学

部局名：造形学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 80449347

研究分担者氏名：金 考卿

ローマ字氏名：KIM, Hyogyon

所属研究機関名：大阪大学

部局名：国際教育交流センター

職名：特任准教授(常勤)

研究者番号(8桁): 30467063

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。